

社 会 組 織

波 平 勇 夫

くり返しになるかも知れないが、調査全体のなかの本報告の位置づけからのべることにする。国頭・与論の第1次調査（国頭調査昭和53年8月25～28日、与論調査同9月8～17日）に先立って、昭和53年7月25日に「与論・国頭第1次調査団会議」がもたれ、調査視点あるいは調査枠組が話し合われた。その結果、調査員をそれぞれの専門分野と関心領域から、経済、村落、民俗・言語の3つの研究班に編成することになった。そのなかで、筆者の属する村落構造研究グループは、村落を(1)集落立地、(2)社会組織、(3)生産組織、(4)農業と経済の各面から調査することになった。ここで報告するのは、(2)社会組織であり、そのなかで家族・親族（別報告）と祭祀組織は除かれる。

国頭調査は字宜名真が中心であったが、調査内容によっては辺戸、辺土名、桃原の各村落も調査された。調査方法として、調査票（資料参照）を作成し、それをもとにして聴取り調査をした。調査内容は大きく分けて4項目からなり、それぞれ、つぎの通りである。(1)組、(2)模合、(3)自治組織、(4)年齢階梯集団の4つである。当初、この4項目によって国頭と与論を比較する予定であったが、結果的に、これら4項目は両地域にわたって均等に調査されていない。その理由は、調査期間が十分でなかったこと、沖縄本島の北端に位置する国頭は、離島の与論島にくらべて随時調査できるということなどである。

A 辺 戸

(1) 組＝共同労働形態

機能面からみると、生産組織なのかそれ以外の社会組織なのか区別が困難な場合もあるが、そのことにあまりとらわれずに、村落における主な組織をとりあげていくことにする。その1つは相互扶助と生産を主目的とする労働組織、イーモール（結い組）である。イーモールは以前にくらべて衰頹しつつあるが、砂糖キビの苅取、搬出には今日でも利用されている。まず、5～6名が1つの組を構成するが、その構成員はだいたい固定している。彼らは同じ字民ということに加えて、親戚か、知人か、隣人か、あるいはそれらの複合的關係に立っている。すなわち、親戚だけとか、知人だけというような単一関係による組構成はみられない。

組は成人男女によって構成されるが、男女の労働力は等価ではない。男子労働力を受けた人（または家）は男子労働力を返済しなければならない。女子労働力を受けた人は女子労働力を返済することが期待される。もし、このような相互扶助システムがうまく作用しない場合、たとえば、男子労働力を受けた見返りとして男子労働力を提供すべきはずなのに、病気、緊急な用事、その他の理由で男がイーモールへでられないときは、その男に代って女がでる。その場合、男子労働力との差額分を金で返済する。（ということは、男女の日給がそれぞれ別々に定

められている。) 場合によっては、女ではなく、代理を組構成員以外の人から臨時にだすこともある。もちろん、男女間の労働力交換の原則は貫かれる。

組そのものの内部組織は分化していない。というのは、組頭のような世話役さえいない。ただ、先にキビ茹をする人が他の組員に連絡して協力を求めるという方法をとっているようである。その場合、だれが先になるかはそのときどきの状況次第で、別に合理的な方法があるわけではない。また、作業方法は、特定の組員の作業をすべてかたづけてから次の組員の作業にとりかかるという方法ではなく、一定量の生産高を目安にして、各組員の生産が交互に行われている。たとえばキビ茹の場合であれば、特定のトラック1台分ずつ茹出して、順次、組員から組員へと移っていく方法をとっている。もちろん、トラックの1台以内しか収穫できない人、2台、あるいは3台以上もある人など、生産量は一定しない。その場合、収穫高の差額は労賃で清算される。

キビ茹以外では、家建築がイーモールでなされたようである。この場合、特定の組ではなく、ムラ中の戸主や青年層がイーモールに参加した。しかし、このようなイーモールは戦前までの制度で、戦後とくに今日の家づくりは専門の職人による請負と親戚の手伝いなどによってなされている。

その他、辺戸では約20年頃前までサーター組があった。これは製糖組で、5～6軒で1組を構成していた。製糖用施設であるサーター屋（製糖小屋）はムラ有で、キビを植付けしてあるかどうかに関係なく、各戸が資金（株）をだし合って設立した。作業はイーモール員が中心であったが、場合によっては親戚が手伝うこともあった。砂糖製造人はふつう日雇で依頼した。

以上は各家がそれぞれ中心となる共同労働であるが、中心が各家ではなく、ムラ自体である場合の共同労働（これは結い組と区別される。）もある。これは、ウェーレーまたはシツプーと呼ばれ、各戸から戸主がでた。今日では、道路整備、農道、ヌンドンチ、ウガンジュなどの掃除および整備がなされる。これにでなければ、4～5000円ムラにださなければならないという。

(2) 年齢集団

年齢層が集団形成の基準となっている年齢集団も社会組織の1局面である。他の社会集団と同様、年齢集団も時代とともに変化することから、ここでは、明治末期から昭和初期までの時点を中心に報告することにする。

(イ) 年齢集団と呼称

男子の場合、子どもはワラビ、遊び仲間はエーズウーと呼ばれ、14才ごろ（尋常小学校の児童）までの男の子が構成員であった。15才以上になるとワカムン（若者）、ニーセーと呼ばれた。ワカムンとかニーセーは年齢階梯にもとづく名称であり、集団そのものに対する名称ではない。伝統的な若者組がどのようなものであり、それが何と呼ばれたかは不明な部分が多いが、後でみるようにその構造は不定型のものであったと思われる。官製のものとしては青年会がある。青年会は明治の末期に国頭の各村で結成され、15から25才までの男子が加入した。25才を過ぎ、

(1) 国頭村役所『国頭村史』（宮城栄昌執筆、1967、443～446頁。なお、聴取り調査によっては確かめられない年代については、この資料に依拠している。

また結婚すると、青年会を退会し、向上会に加入した。向上会の構成員は、戸主と既婚男子であった。したがって、親が戸主で、長男と二男がそれぞれ結婚してしかも同一家族員であれば、この家から3人（父親、長男、二男）が向上会会員ということになる。この場合、もし二男が分家すれば、彼は戸主として向上会に加入することになる。向上会会員の年齢上限は45才であった。

45才という年限は当時の平均寿命から設定されたものであろう。それ以上になれば老人である。ところが、老人の組織はなかったようである。ただ、向上会とは別に戸主会というのがあって、文字通り戸主で構成され、とくに重要事項を協議する場合に開かれた。もちろん、分家したばかりの二、三男も戸主にかわりはないので、戸主会は老人組織ではないが、年寄が比較的威信をもっていたかも知れない。

つぎに、女子の場合をみよう。14才以下の子どもの場合、男女間の呼称の区別はない。すなわち、女の子どもに対してワラビ、遊び友達に対してエーズウーと呼ぶ。15才に達すると、青年期に入ったことになり、呼称もミヤラビとなる。これは男子の場合のニーサーに対する呼称である。20才前後で結婚すると、女子は婦人会に入った。

(ロ) 集団加入及び退団

年齢集団の特徴は、成員資格が常に過渡的だということ、別のいいかたをすれば、集団が年齢によって規定されている以上、加入も退団も年齢とともに自然に移行するということである。したがって、年齢集団に特別な社会的意義（たとえば、政治上、宗教上、生産上）が附与されていない限り、加入・退団に関する特別な儀式はなかったと思われる。残念ながら、このことを辺戸で確かめることはできなかった。

(ハ) 集団の構造と機能

青年会のような官製の組織を除けば、子ども組にしても若者組にしても4～5名から構成される不定型の集団だったようである。たとえば、子ども集団の場合、比較的固定した関係（近隣という地縁性がその中心）によって集団が形成されるものの、特定のリーダーは必要でなかった。リーダーがいなくても、活動（遊び）は可能だったのである。もちろん、年上の子ども、力の強い子どもがいて、ときどきリーダー的存在を示すことはあったが、その機能は固定したものではなかったようである。

構造が明確になり、機能が分化した集団としては、やはり、官製の青年会、向上会、婦人会があげられる。まず、15才に達した男子は青年会のメンバーとなると同時に、1人前としてムラのシツブーにかりだされた。後者は、伝統的な青年と村落の関係であるが、前者はもちろん近代国家が形成された後の、青年と国家の関係であった。この2つは別々のものである。しかも、前者は後者を否定するという関係、すなわち、青年が国家社会に組み入れられることによって、村落も国家社会に組み入れられ、あるいは解体される宿命にあったが、現象として青年会活動に危機的状況があったことはきかれなかった。

向上会もその性格において青年会と似ている。役割分化という点でも両者は共通して、明確な構造をもっている。ただ相違点として、向上会は村落全体を統括する機能を有していたとい

うことである。なお、向上会とは別に戸主会があったことはすでにふれた。より重要な事項を協議する場合に戸主会が開かれたということからすれば、戸主会は向上会より一段上位に位置づけられそうであるが、両者の関係は明らかではない。

(二) 青年集団

これまで年齢集団を全体的にみてきたが、ここでは青年集団に限定するとともに、それ独自の活動、あるいはインフォーマルな活動に焦点をあててみよう。青年にとって、同性どうしあるいは異性間の交流は重要な意味をもつ。遊びをとうして教養をみがき、新しい情報に接し、相手を見つけて結婚に達する。青年仲間の自発的交渉のなかで、モーアシビ（野遊び）はもっとも典型的なものであった。これは男女が晩、野外にでかけて歌ったり踊ったりして遊ぶ全く自由な交渉形態である。遊び場所として、辺戸の場合、拝所やムラはずれなどが利用された。

遊んだ後、遊び仲間が一諸に寝泊りする寝宿があった。男子の場合、村屋が利用されたが、女子の場合、友人宅や老人のいる家が利用された。女子の寝泊する家、娘宿がヤガマヤーである。ここに男子が集まることはいうまでもない。ここに集まってモーアシビにでかけたり、場合によっては、遊んだ後、男女ここで寝るということもあった。このためにはある程度自由な雰囲気が要求されるため、うるさくない家がヤガマヤーとして利用された。なお、ヨバイは大正の中ごろまでであったという。

モーアシビを含めて、青年集団が大きく変容したのは、大正の中ごろから多くの女子が紡績工場へ募集されてからであった。1人1人ムラを離れていくと、ムラにいたことがとり残されたかたちになるため、ほとんどの青年男女が離村していった。このようにして、伝統的な青年集団は衰頹していくのである。

B 宜名真

(1) 組＝共同労働形態

宜名真における組＝共同労働形態も辺戸の場合と大差ないようである。ここでも共同労働はイーマールと呼ばれ、キビ苧、田植、稲苧の場合に利用される。構成員数は労働内容によっても異なるが、たとえば、キビ苧の場合20名前後、田植とか稲苧の場合は7～8名がふつうであった。構成員の相互関係は労働力調達のみが目的とされ、親戚とか隣人とかいう特定関係を機能的要件としなかった。

今日みられなくなった組に、サーター組があった。サーター屋は、戦前、宜名真に2つあり、キビ作りしている農家はみなサーター組に入った（入らなければ製糖できなかった）。したがって、イーマールもキビ作りをしている人を中心に組織された。当然、彼らは親戚関係とは限らなかったのである。サーター組は、いわば生産者組合でもあったため、相互に対等な関係に立っていたようである。

つぎに、イーマールの組織構造をみよう。そこには組頭のようなものはなく、労働力を必要とする当事者が頭的存在となる。当然、特定の家の作業がかたづけば、不定型の「頭」も交替

する。

イーマールは労働力によって組織化されたものであるとすれば、組内で期待され実現される役割は労働力ということになる。どのような労働力が期待され、実際はどうであったかということは労働の内容によって異なった。たとえば、キビ苧、田植、稲苧は15才以上の男子、製糖は1人前の男女の労働力がそれぞれ期待されたが、実際にはいずれも性別をとわなかった。その場合、男女間の労働力の差が問題になるが、その差がどのように補填されたかについては調査できなかった。

結い組と区別される共同労働形態の1つに、ムラ作業のための労働組織がある。宜名真ではムラ作業のことをブーと呼び、道路の改修作業、以前は猪垣造りなどがあった。作業は字の下位組織である班単位で行われ、各戸から1人ずつでた。この慣行は今でもあり、不参加の場合、4500円字に支払う。

(2) 年齢集団

(イ) 年齢集団と呼称

14才以下の子どもは、男女の別なくワラビーと呼ばれ、15才以上になると男子はニーサー、女子はミヤラビ（場合によってはンミー）と呼ばれた。定型的集団への加入は15才以上でありその最初の集団が青年会である。男子は15才以上25才まで、女子は15才以上結婚までのそれぞれの該当者がその会員となった。26才以上になると男子は成人会へ加入した。

(ロ) 集団加入及び退団

14才以下の子どもが形成する不定型の集団の場合、形式的な加入及び退団の様式はみられなかったが、青年会や向上会のような定型的な集団の場合、何らかの儀式がもたれたとみられる。しかし、今回の調査ではその具体的方法は聴取れなかった。

(ハ) 集団の構造及び機能

年齢集団のなかで、村落の生産と自治の面で大きな役割をもつものは、青年以上の村人の加入する集団であろう。青年の伝統的な活動内容をみると、アブシバレー、エイサー、十五夜などのムラ行事への参加、シツプーなどの労役がその主なものであった。青年は成人会会員でもあり、結局、青年会は向上会の下位組織ではあったが、青年はムラの生産、自治面で大きな役割を果たした。

(二) 青年集団

年齢集団のなかで、青年集団だけとりだしてみよう。伝統的な不定型の若者組が、いつごろから青年会になったのか、聴取り調査からは不明であるが、『国頭村史』（注1）から推察すれば、宜名真でも明治末期に青年会が結成されたことになる。青年会の活動についてはすでにふれたので、ここではインフォーマルな活動内容のみに限定してのべることにする。その代表的なものがモーアシビである。モーアシビは14～5才から始められ、場所は道路、山林など人通りの少ないところ選ばれた。モーアシビは若者の社交の場であり、異性と接触する場所でもあった。モーアシビから結婚へ発展することもあったが、モーアシビと結婚は全く別々のもので、前者は自由な交際の場であった。

寝宿はあった。しかし、その呼称とか内容についてはくわしい資料を得ることはできなかった。

た。

(3) 自治組織

当初の計画では、明治末期から昭和初期までの自治組織ならびに活動を調査する予定であったが、今回の調査ではそれに関するデータを得ることはできなかった。結局、戦後（昭和36年以降）の記録しか得られなかったもので、資料程度に報告することにする。

宜名真は、現在、7つの班から構成され、役員組織はつぎのようにになっている。区長を頂点として書記及び会計の3役と、各班から2名ずつの代議員、各種協力団体長、顧問3名が自治組織の中核である。各種協力団体とは、成人会、婦人会、青年会をさす（宜名真部落内規第5条）。先にみた年齢集団が今回の村落組織でも継承されており、自治活動のかなめになっている。

というのは、今日、村落の社会組織（とくに行政組織）は国家行政組織の末端部となり、村落が国家統制機関の1つになっている状況下において自治活動というのは限られたものであり、さきにみたような年齢集団を中心とするムラの伝統的自治活動よりも、村役場と直結した行政業務が優勢になってきている。それは典型的に、区長職に現われている。区長は部落と役場（この場合、宜名真と国頭村役場）のパイプ役であり、その業務は煩瑣をきわめている。宜名真区長の場合、役所の委託業務が大部分であるが、その他、国頭農協、国頭村林業組合、教育関係（PTA 副会長である）などの役員を兼ね、そして、部落の年中行事（アブシバレー、爬竜船競漕、エーサー、敬老会など）を統轄する。また、部落を離れた人びとがつくっている郷友会との連絡も区長が公的窓口となってなされている。

昭和36年から同53年までの歴代区長9名について、在任期間、資産、学歴、経済、親族関係を調べた。目的は、リーダーの社会的性格をみるためであった。しかし、特別にきわだった特徴はでてこなかった。たとえば、土地所有面積をみると、約3000坪有していた人は3名程で、それ以下2000坪の所有者が2名、残りは約1000坪以下である。学歴をみると、嘉手納農林学校卒業は1名で、残りは尋常小学校卒業者である。

部落の役員は選挙で選ばれ、任期は1年で有給である。たとえば区長の場合、部落から30,000円、役場から90,000円支給される。書記と会計は兼務で11,000円支給されている。

部落民＝宜名真区民は、公共施設、共同店、公有林を利用する権利が保障されるが（部落内規第2条）、新しく部落に入ってくる者に対してとくべつ排他的なところはない。昭和52年度に那覇出身の人が部落民になったが、部落の役員会で挨拶する程度で了承された。

C 桃原 一年齢集団を中心に

国頭村字桃原の調査は年齢集団だけに限定された。というのは、当初、この部落は調査予定地に入っていなかったけれども、昭和初期（昭和5年）に字青年会長として活動された安里常次郎氏（明治40年生）、同期の副会長山城久一氏（明治44年生）に接する機会を得たので、とくに青年会を中心に聴取りしたのである。

(1) 年齢集団と呼称

14才までの子どもは、男女の区別なくワラビと呼ばれ、集団形態は遊びを中心とする不定型の仲間集団であった。15才に達すると（尋常小学校卒業）、男子はニーサーと呼ばれた。古くはニーサーだけの集団というものはなかったが、集団の原形ともいえる遊び仲間を中心とした不定型の「集団」はあったようである。明治末期になって桃原青年会が結成されると、ニーサーは純然とした定型集団に組み込まれていった。15才で1人前とみられ、青年会に加入したのである。青年会は25才までで、それを過ぎると向上会に入った。向上会は45才までの男子（後に女子も加入）が加入した。45才を過ぎると公的役割から解放されたが、それ以後は特定の社会集団を形成するということはなかったようである。

(2) 集団加入及び退団

加入及び退団様式は、定型的な青年会の場合 はっきりしていた。尋常小学校を卒業した年の4月になると、加入会というのがあり、25才に達すると、その年の正月を期して退会式があり、いずれも盛大な催しとなった。

(3) 集団の構造と機能

15才以下の子どもは遊びを中心として、不定型の集団を形成していたということはすでにふれた。明治末期になり、青年会が結成されると、若者たちは定型的集団を構成するばかりでなく、会長以下の役職をもつ組織集団員となり、村落社会だけでなく国家社会を支える重要な役割を附与されたのである。青年会はその初期において向上会の下位組織であった。したがって、青年会会員のいる家では父親も息子も向上会の会員であった。しかし、後になって、青年会は向上会から分離独立し、また、15才以上の婦女の加入する婦人会も向上会から独立した。

各集団の機能をみよう。青年会の場合、村落レベルでは アブシパー、ウシデーク（桃原は字奥間から分村であるため、この行事の中心は奥間であるが、桃原もこれに参加する）などの年中行事への参加、屋ふきウェデー（奉仕）、 シュツプーへの義務が課せられた。青年会は向上会の下位組織ではあったが、向上会の活動面では中心的役割を果たし、週1回会合をもった。青年会が向上会から分離独立するようになると、その独自性が発揮され、キビ苧や耕地作業などで資金をつくり、運動競技会、修養会、弁論大会などを開いた。このような青年会活動は村落レベルで行われるとともに、国頭郡青年会が結成されると（明治末期）、 全郡的活動となった。

青年の修養会についてみる。その1つは読書を中心としたもので、晩開かれた。青年文庫が奥で始められたのにならい、桃原ではずっとおくれで大正11年に青年文庫が設立され、雑誌を中心とした読書活動が盛んとなった。当時、よく読まれた雑誌はキング、婦人クラブであり、その他、青年、シメイなどの雑誌がよく読まれた。修養会のもう1つの面は農業技術の奨励である。技術改良、新技術の導入などに関しては体験発表会を開き、農業振興のために青年会が率先して活動した。殊算、弁論大会、講演会なども、それぞれ主要な活動項目であった。

向上会は、当初、戸主だけでなく、青年、婦人も含めて複合的形態をなし、村落の重要決議機関であり、中心組織であった。しかし、後になって、この組織が青年会、婦人会というよう

に内部分化してくると、個々の活動はこれら下位組織を中心に行われた。そして向上会は、ムラ全体としての重要事項、緊急事項の話し合いの場合だけ召集された。通常、月1回開かれたが、緊急時においてはいつでもホラ貝の音を合図に集まった。ホラ貝の音を聞くと、なにかが起こった予感がしたという。

このように、向上会は村内規の立法機関であるばかりでなく、執行及び取り締り機関でもあった。風紀取り締りはその主なものであった。大正5、6年頃には桃原部落に投書箱が置かれて、公序良俗の違反者は取り締りの対象となった。その他、ムラの行事、ムラブーなども向上会の主要な活動内容であった。また、向上会会員は、屋造りウェーデーにもでなければならなかった。

(4) 青年集団

年齢集団のうち、青年集団に限定してまとめてみよう。15才以上になると青年は1人前とみられ、また、明治末期に青年会が結成されると、その成員になったことは、すでにのべた。それまでの青年（ニーサー）は、1人前の労働力として家族や村の生産活動、あるいは年中行事、ムラブーに参加したが、集団形態はあくまでも不定型のものであった。しかし、青年会結成後は定型的集団のなかで、組織化された活動に参加した。このようなフォーマルな活動についてはふれたので、ここでは、青年独自のインフォーマルな生活だけに限定してみることにする。

その代表的なものがヤガマヤーである。それは娘宿のことで、娘たちが晩集まって仕事をしたり、遊んだり、場合によっては野外で遊んだ後、寝るために集まる場所であった。このようなところに若者が集まってくるのは自然であった。ここで男女青年は夜なべ仕事、ヌーチー（会食）などをして交流した。遊んだ後、ヤガマヤーで男女投宿することもあり、その場合、男女は別々の部屋をとった。

こうしてヤガマヤーは仕事場、交流の場、修養の場としての機能を果たした。ここは若い人びとの自由が許容される若者の聖域でなければならなかったため、あまりきびしくない家、通常、老人の家がヤガマヤーの場所に選定された。大正期も中ごろを過ぎると、若い人びとが本土の労働市場へ吸収され、ヤガマヤーも衰頹していった。